

No. 42

ねじればね

May, 1980

昭和55年5月20日発行

編集者：後藤光男

〒591

堺市百舌鳥西之町1丁98の2

陵南住宅1号棟116号

電話：(0722)57局7009番

日本甲虫学会

〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8

大倉正文方

電話：神戸(078)811局2706番

奈良公園若草山の食糞コガネの知見

後藤光男

“山頂はシカのフンだらけ弁当ひろげる所ないや”の頭書で“若草山”の紹介が大阪新聞(昭和54年11月16日付夕刊)に載っているのが目に止まった。「明るい戸外で弁当を食おうか、と衆議一決、家族そろって奈良公園へ出かけた。近鉄・奈良駅からゆるゆる歩いて県庁前から興福寺を抜け、浅茅ヶ原から若草山へ。入山料おとな100円、こども50円ナリを払って、山頂へたどりついた。時計の針は午前11時45分、「そろそろ弁当にするか」と、座る場所を捜したが、あちにもこっちにもシカのフンがころころあって、草の上にじかに座れたものではない。遠くから見るとあの優美な姿とは大変な違い。結局、ずっと下においてビニールの敷き物を出して、弁当を広げたが、フンの“落とし主”であるシカの姿は見当らない。「昼間はどういうわけか、少ないですな。理由?、さあ」(奈良公園事務所)。若草山は25日までオープンだが、もし、山頂で弁当を、とお考えのムキは、ご注意を。(か)」(原文のまま)と書かれていた。この場所は私がよく訪れたところで若草山の第1峯の左端で一軒茶屋のある辺りと思われる。茶屋の裏からは二月堂への道が、表からは木立ち沿いに麓へと道がついており、茶店から上へ第2峯を経て山頂の鶯塚へと道が整備されていて、新緑の頃と紅葉の頃は人の列が絶えない。茶店の辺りはシカの餌場になっていて遊歩客の残した弁当屑に集まるシカの姿を早朝と夕暮に見ることができる。シカは二月堂の裏山からこの辺りを経て春日神社の繁みに至るコースをとり、私はいつもシカのフンを頼りにこのシカ道を辿って食糞コガネの観察をすることになっている。この第1峯から麓にかけて両側の木立部を除いて全く日陰がないから、観察できる食糞コガネ類は好陽性の種が優先する。ルリセンチ

コガネ・センチコガネ・ゴホンダイコクコガネ・ニッコウコエンマコガネ・エゾコエンマコガネ・ヒメコエンマコガネ・フトカドエンマコガネ・ナガスネエンマコガネ・クロツヤマグソコガネ・コツヤマグソコガネ・オビマグソコガネ・スジマグソコガネ・ヒメコマグソコガネ等であと数種記録している。上記の種の中で従来から珍しいとされていたヒメコマグソコガネはごく普通に見られるのは特筆すべきである。ヒメコマグソコガネ *Aphodius (Ordalus) naraensis* NAKANE, 1956 は和田義人氏採集の2頭にもとづいて記載 (Ins. Mats., XX, 3/4, p. 120, 1956) されたが、私はこの種について若干の知見を得ているので書き添えておく。この種は現在本邦において奈良公園以外からは記録されておらず、奈良公園においてもその産地は局限されていて、年1回春にのみ見られる。その出現は春先からの寒暖にもよるが4月下旬に始まり、5月上旬の終り頃から中旬の終り頃にピークをむかえ、その後急激に個体数が減って6月上旬にはその姿が見られなくなるという出現期の短いマグソコガネである。記載に用いられた標本のデータは4月28日になっていて、出現後間もなく採集された個体といえる。私はこの種の観察に何度も出掛けたが、1970年(昭和45年)の5月には5回にわたってこの種の観察に費し若干の記録をしているので述べてみよう。1日(晴・3)、10日(晴・28)、17日(曇一時雨のち晴・149)、24日(曇時々晴・4)、31日(晴・3) 枠内に示した採集数から見て明かに中旬がピークといえるが、他の年の断片的な記録では1972年(昭和47年)5月21日(晴後曇・28)、31日(晴・3)、1973年(昭和48年)5月6日(晴・90)が見られる。私が観察した限り本種はシカの糞の大きな塊よりも丸形や卵形の集まりにいる方が多く、糞中に浸入していることはなくせいぜい糞の表皮を喰い破って頭を突込んでいるか、又は糞の重なった間に潜む程度であり、ほとんどが糞下の地面に接して湿った場所で多く見られた。又この種は上翅に変異が多く1970年採集の187頭はつぎの7型に分けることができた。A上翅はほとんど赤褐色(1)、B上翅は小楯板をはさみ基部が黒く、他はほとんど赤褐色(3)、C上翅は肩部・側部・翅端が赤褐色(28)、D上翅は肩部・翅端が赤褐色(148)、E上翅は肩部のみ赤褐色(2)、F上翅は翅端のみ赤褐色(4)、G上翅はほとんど黒色(1)。また両側の木立内でマルツヤマグソコガネ *Aphodius (Diapterna) troitzkyi* JACOBSON, 1897 を見ているが、この種は日陰の鹿糞にすることが多く、その出現期は4~6月、9~10月の年2回で滝坂道入口の杉林で観察を続けた。春の記録を要約すると、その出現は4月中旬の終り頃から始まり5月一杯は個体数が多く、ピークといえる現象は見られず、6月上旬から中旬、下旬の始めにかけて、緩いカーブ

を画いて姿を消すことを知った。又この種は糞下にいる時より糞の中へ潜む習性があり、単独で潜んでいるのは稍で複数以上に潜む場合が多く、私の見た限り食餌とする鹿糞が同一条件下にあっても、必ず潜んでいる鹿糞と好条件なのに潜んでいない鹿糞とがあり、奈良公園では鹿の食する餌にも起因するのではないかと考えている。

標 本 箱 の 寸 法

後 藤 光 男

私の使っている標本箱は少数の池村光太郎商店製（京都）のドイツ型の中形と甲虫用インロー型を除いてすべて志賀昆虫普及社製（東京）で、ドイツ型の中形とインロー硝子蓋式の特大形・中形の3種類で揃えている。標本の仮整理用には私製の厚ボール紙標本箱（本誌、第27号、8-12頁、昭和44年）を使っている。この紙製標本箱もできるだけその寸法を揃えるよう心掛けているが食料品・衣類の化粧外装箱の廃物利用なので手頃の広さの厚紙がまとまらず、仕上りの不揃いは止むを得ないと思っている。私製標本箱も少数の時はその寸法の不揃いも目立たず又あまり気にもならないが、甲虫用インロー型の中形級を10箱程積みあげると同一ロットの場合は揃っているが10箱すべてでは3種ぐらいに分けることができ、その不揃いが気になって仕方がない。ポケット箱の場合でもその厚紙有効面積を最大限に利用しているので、その不揃いはひどいものである。この紙製標本箱を作ってきた段階で調和のとれた外寸比と立体観に加え、その収容量の有効という点から市販の標本箱はどのようなものであるかを調べて見た。現在皆が使っている標本箱は、いつ頃、誰が、何処で、どのような材質・仕様で作られ使われたかは私は知らない。しかし現在戦前にあったガラス板横差しとか二重式やブック形はあまり見かけなくなって、ドイツ型とインロー型のガラス蓋式と甲虫専用とに定着してきているように思われる。又その高さも超大形甲虫・蝶用として8種のものもあるが、一般には6種のものが標準のようである。有頭・無頭の昆虫針も40mmが標準となっている。戦前はどのような寸法であったか少しく調べて見た。名和昆虫研究所・昆虫趣味の会・平山博物館・志賀昆虫普及社・横山昆虫研究所・遠藤昆虫研究所・島津製作所・内田洋行等で用具が取扱われており、それぞれカタログも発行されていたが今は手近に見当たらないので、会の機関誌に頼った。“昆虫世界”と“昆虫界”には大きさと価格は掲載されているが寸法の明示はなく、

幸い“虫の世界”にその寸法と価格を知ることができた。その第3巻第3・4号(昭和14年4月)によると、ドイツ型・二重側・インロー蓋・両面・紙製・甲虫インロー蓋・携帯の7種類で、価格については40年前のものであり物価指数のとり方も不明確で無意味と思われるので云々は避けてその寸法に言及すると、その表示は尺貫法である。横・縦の寸法は後に触れるがその高さは両面3寸(11.4糎)、携帯1寸7分~1寸8分(6.46~6.48糎)で他の木製標本箱はいづれも2寸(7.6糎)の高さになっており、昆虫針もアスター型(有頭、真鍮製に銀鍍金)1寸2分5厘(4.75糎)で、超大型甲虫・蝶も楽に収納整理できる寸法となっている。今は当時の標本箱を持合せないので何とも言えないが、他社の標本箱も高さ1寸2分5厘前後でなかっただろうか。閉鎖前に見た城北公園(大阪)の昆虫館の標本箱も可成り深かったと記憶している。用具のカタログを調べていて気付いたことだが、その寸法の表現が2つあって横×縦×高さと縦×横×高さである。ドイツ型標本箱を比べて見ると、平山製中形は横1尺8分(41.04糎)×縦1尺3寸8分(52.44糎)×高さ2寸(7.6糎)、志賀製大形50糎×41.8糎×6糎、池村製大形50.5糎×41.8糎×6糎、大阪博物製42糎×51糎×6糎となっていて、平山製は明かに縦長の表現で他社のものを平山製の表現をすると志賀・池村製は平山製と同じ縦長で大阪博物は横長となる。私は標本箱は横長の位置で標本の整理がされるものと思い込んでいるので、カタログの寸法表現に少しく不満を感じた。標本箱は木製・紙製が一般的であるが樹脂製のものもあって開け閉めやその他においてやや難点があるように聞いているが、私は使ったことがないので何ともいえない。今もっとも利用者が多いのは、日本鱗翅学会が考案された「新ドイツ箱」で東京と大阪の用具店と同会の支部で容易に入手できる仕組みになっていて、専用のスチール製戸棚(10箱収納、46.5×55×77.5糎)もあり標本箱の一定化と保管の統一化ができて便利と思う。この標本箱の寸法は51糎×42糎×6.25糎が規格寸法とされているが取扱い用具店のカタログでは、タツミ製作所50.9糎×41.8糎×6糎、大阪博物館42×51×6糎と同一規格であっても、その表現寸法はカタログの上では不揃いである。少数の標本箱なら積上げて構わないが標本箱を沢山もっている時は標本タンスか標本棚が必要となる。標本タンスの方はカタログにも記載されているので、A社の標本箱にはA社の標本タンスをB社についてはB社において賄えるが、A社のものをB社で、B社のものをA社で納めようとするれば可能な場合もあるけれども仲々むづかしい。値段も手頃な上効率的に使用できるプリント合板製の棚類も街中で多く見掛けるが、JIS規格による棚寸法にJIS規格によらない標本箱寸法では合う筈もなく、非効率的な収容量で我慢

しない限りは別註の標本棚に頼らざるを得ない。J I S規格タンス・棚に有効に収容できる標本箱の寸法は縦横これだという結論は得ていないが、面白い発想と自己満足している。縦長か横長か一寸見当がつかない。この駄文を書くために戦前の会報・機関誌等を調べて標本箱の寸法について縦：横又は横：縦の比はカタログによってまちまちであり規格というものが見出せなかった結論に達したが、今でも親密な御指導を賜っている諸先輩に活字の上でお目にかかれたのが、大変有意義な一日であった。終りに私が見たカタログから標本箱は横：縦の比が別表のようであり、大形・中形・小形の間に関連性がなく横長から縦長が決定されて製造され、我々がこれを求めてこの面積中に判りやすく、カッコよく標本整理をしているようである。只平山製のドイツ型大形は横1尺3寸8分(52.44糎)縦1尺6寸8分(63.84糎)高サ2寸(7.6糎)となっており、現在のドイツ型大形より一廻り大きい標本箱が市販されていて、一度見てみたいものだと思っている。

	横	縦	横：縦		横	縦	横：縦
<u>平山博物館</u> (尺貫法) 尺・寸・分で示す				<u>志賀昆虫普及社</u> (米法) 糎・耗で示す			
ドイツ型大	1.6.8	1.3.8	.8214	ドイツ型大	50.0	41.8	.836
〃 中	1.3.8	1.0.8	.7826	〃 中	42.5	32.7	.769
〃 小	1.2.3	9.5	.7724	ガラス蓋特	40.0	30.0	.750
二重側大	1.4.0	1.1.0	.7857	〃 大	35.8	26.7	.746
〃 小	1.2.5	8.5	.6800	〃 中	31.5	22.0	.698
インロー大	1.1.7	9.0	.7692	〃 小	20.5	15.5	.756
〃 小	1.0.0	7.0	.7000	インロー大	36.0	27.0	.750
両面	1.1.7	9.0	.7692	〃 小	30.5	21.0	.689
携帯大	5.5	3.0	.5455	K S 型大	36.0	27.0	.750
〃 小	4.1	2.8	.6829	〃 小	30.5	21.0	.689
				携 帯	21.0	15.0	.714
<u>大阪博物</u> (米法) 糎・耗で示す				<u>ポケット大</u> 17.0 10.0 .588			
ドイツ型大	51.0	42.0	.8235	〃 小	13.0	9.0	.692
〃 中	42.0	33.0	.7857				
ガラス蓋	40.0	32.0	.8000	<u>タツミ製作所</u> (米法) 糎・耗で示す			

インロー大	36.0	27.0	.7500	ドイツ型大	50.9	41.8	.8212
〃 小	30.5	21.0	.6886	〃	42.4	32.8	.7736

池村商店(米法)糧・耗で示す

ドイツ型大	50.5	41.8	.8277
〃 中	42.5	33.0	.7765
インロー	31.5	22.0	.6984
〃	30.0	22.0	.7333

吸虫管付属”吸気球”について

後 藤 光 男

上京の折に私は志賀昆虫普及社に必ず立寄ることになっている。それは勤務先の事業所が山梨県中巨摩郡甲西町にあつて、甲府に向う中央線の時間待ちの時であつたり、直営ブティックのある原宿・青山・六本木店に行く道すがらであつたりする。本年3月17日午前中に立寄つて陳列ケースの中に卵型の黒色ゴム製器具を見付けた。聞いて見ると吸虫管の吸口に取付けて、ゴム球の圧・戻しによつて微小昆虫を吸い込む役目をする器具で、口で吸う替りにゴム球に代用させるということである。試した結果はまだ判らないので使つた結果を知らせて欲しいとの事で求めて持ち販つた。この採集用部品については能勢妙見笹部でお会いした折野村全氏が使つておられたが、その効果については聞いていない。このゴム球について、どこかで紹介された記事が記憶にあつたので調べて見たら、本誌(通巻2号、1巻2号、3頁、昭和31年)に河野洋氏がK・K式微小甲虫吸虫管(特許申請中)として紹介されており、加治木義博氏の使用型も図示されていて、吸虫管ガラス部本体にK・K式は直結型でY・K式はゴム管接続型となつていた。効果についてはその後の報告もないので判らないが、私も早くこの器具を充分使いこなして効果をためて見たいと思つている。まだ正式名称はないようであるので、河野洋氏の文中にある“吸気球”と仮に名付けて文を続けたい。この吸気球は黒色の厚手ゴム製で中心部の外部直径は4.5耗で、球部の長さは7.5耗あり、両側は共に1.7耗突出して、吸口は径1.2耗でその中央に5耗の穴があり0.5耗のステンレス棒がその穴部中央に横位(又は縦位)に装置されている。一方吸虫管に接する方は長さ2.9耗、外径1.0

耗、内径5耗の厚手ゴム管で吸虫管の昆虫吸込口に接続するように作られている。幸い4月29日に大阪市立大学に接する大和川河川敷に行く機会があり試して見た。通勤の往き帰り毎日見馴れている河川敷は思っていたより貧弱で、ミズギワゴミムシとアリガタハナカクシの仲間を2・3見ただけであった。吸気球を親指と人差指で圧して戻す程度であれば虫はガラス管に吸い込まれるが、指を戻したら吸虫管本体に達せずガラス管を逆戻りして管外に飛び出し、吸気球を手の掌で強く握りしめた場合には虫は吸虫管本体に深く吸い込まれることが判った。又机上の実験では吸いたいものと吸口端の角度によって勢いよく吸い込まれる時と全く吸い込まれない時があることも判った。只一回の実験でその効果を云々することはできないが、数多く試して見て結論を得たいと思っている。

ラベル印刷あれこれ 追補(3)

後 藤 光 男

(h)

最近必要があつて活字押器の1号を買求めた。型は従来のと全く同じであるが、材質と作製方法に異つていることを知った。従来のは真鍮製で各片の熔接によつて仕上つているのに対して、今度のは軽合金(アルミ地金?)であり鑄込みと思われ非常に軽い。又底部に接する横長片の下部が切断されていて、組版・印刷には全く支障はないが、鑄込みに必要な型枠のために穴をあけたものではないかと思つている。

(i)

私の標本箱にはすべて品名差(見出し金具)を打ちつけて見出しラベルで中の標本の所属する科や属を明示している。見出しラベルの日焼けを防ぐためプラスチックの薄板を保護膜として使つているが寸法通りに切断するのに苦勞する。薄板面に切断目印をつけるのに筆記用具によつて膜面に目印がのるものと、のらないものがある。マジックインクでも極細のものがのらずに極太のものがのるといふ不具合がある。私は必要とする切断寸法を白紙上に書き、この上にプラスチックの薄板を固定して、白紙の目印に定規をあてて必要寸法を切断する方法をとつている。この方法だと四角・三角・円形等自由に切断できる。

新入会員



方

復活



住所変更



一方

退 会

認 定 退 会

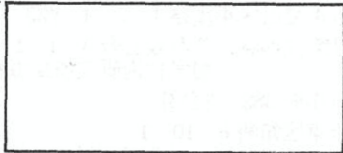
昭和54年度 収支決算書（昭和54年1月1日より12月31日まで）

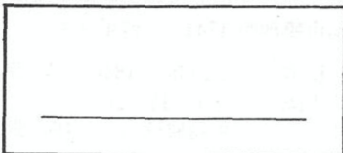
収 入 の 部			支 出 の 部			
会	費	1,526,900円	印	刷	費	1,098,550円
バ	ク	58,000	通	信	費	188,070
別	刷	117,600	消	耗	品	760
寄	付	100,000	大	会	費	36,280
函	鑑	83,310	幹	事	費	460
雑	収	48,797	雑		費	25,900
仮	受	135,000	仮	受	金	135,000
預	り	500	預	り	金	500
前	期	270,160	次	期	繰	越
	繰		越	金		854,747
	越					
	金					
計		2,340,267	計			2,340,267

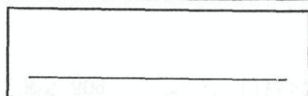
※ 現在までに学会へ繰入れられた印税合計 1,818,853円

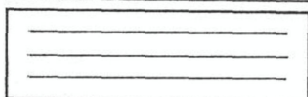
特 別 会 計 収 支 計 算 書 （ 会 報 発 行 基 金 ）

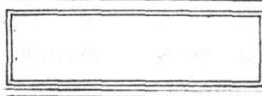
昭和54年	1. 1	前期繰越金		957,634
	1. 20	45万円貸付信託収益金	(53. 7.20~54. 1.19)	9,097
	3. 26	金銭信託収益金	(53. 9.26~54. 3.25)	2,123
	5. 20	40万円貸付信託収益金	(53.11.20~54. 5.19)	8,086
	7. 20	45万円貸付信託収益金	(54. 1.20~54. 7.19)	9,097
	9. 26	金銭信託収益金	(54. 3.26~54. 9.25)	3,089
	11. 20	40万円貸付信託収益金	(54. 5.20~54.11.19)	8,086
	12. 31	次期繰越金		997,212

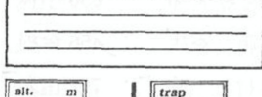
A 



B 



C 


D 


E 


F 


G  



G'  



H 



H' 



I 



I' 



J  



K  



L  

M  

N  

O  

P  

Q  

Y 採集地:
年 月 日 採集
採集者: 後藤光男

後藤光男コレクション

M. GOTO'S COLLECTION NO.
M. GOTO'S COLLECTION
SUBSP. FUJISANUS
酒 粕

Caellus denticollis LEWIS, 1925
Det. M. Goto, 1970

A. (*Orodalus*) *naraensis* Nakano, 1956
Det. M. Goto, 1970

O. (*Gibbenthophagus*) *viduus* Harold, 1874
Det. M. Goto, 1989

Ryonan-Danchi, nr. Mozu Osaka, 19
Mitsuo Goto leg.

Uenoshiha, nr. Mozu Osaka, 19
Mitsuo Goto leg.

DOOJOYO, nr. Sanda, Hyogo, 29, viii, 1976
Mitsuo Goto leg.

Mitsuo Goto's COLLECTION

後藤光男コレクション

< 標本用ラベル >

片数は1枚に対し、価格は1枚についてで、送料は含みません。

A 属種用 (タイプライター印書可)	5片 10円	K 灯火採集表示用	60片 25円
B " (" 1本線入)	5片 10円	L トラップ採集表示用	60片 25円
C 属用 (科・族共)	8片 15円	M ベルレーゼ採集表示用	17片 5円
D 種用	8片 15円	N 樹皮下採集表示用	17片 5円
E 属用 (科・族共)	10片 10円	O 任意記入表示用	77片 20円
F 種用	10片 10円	P 灯火採集・高度表示用	24片 10円
G ♂♀用 小形	♂♀各 14片 5円	Q 台湾産標本表示用	50片 15円
G' ♂♀用	♂♀各 9片 5円	X 品名差用 (枠内白地)	3片 10円
H HOST用 小形	8片 5円	X' 品名差用 (線入り)	3片 10円
H' HOST用	10片 5円	CD 属種組合せ C 2片 + D 5片	7片 10円
I 番号用 小形	16片 5円	Y 4・5ボを中心としたラベル	参考品
I' 番号用	16片 5円	Z Xラベルに欧文・和文刷込	"
J 採集高度表示用	17片 5円	○ 品名差 25×50×0.6厚(mm)アルミ製 4つ穴(釘付)	30円

※ 別註ラベルのご要望にも協力させていただきます。ご相談下さい。

< ラベル印刷用4.5ボ活字セット >

活字は標準セットの本数ですが、必要によって増えます。

大文字：母音各30本、子音10～20本、 小文字：母音各30本、子音10～50本、
 数字：1・8～9各50本、2～7・0各20～30本、
 記号：., -(): ; ? 10～30本、♂♀5本(これのみ6ボ)、
 コミ：全角1/2、1/3各40本、2号4倍8ヶ外8種類、
 器具：活字ケース1枚、活字押器(5段組)2本、ローラー1ヶ、印刷インク等すべて纏めました。
 ※ 活字はその都度必要数を铸造しますから、1か月後にお届けできます。